巻頭言

磯焼けからの回復に向けて

2017 年から続く黒潮大蛇行の影響で伊豆の沿岸では磯焼けが発生しています。

伊豆分場に赴任して丸一年、直接の担当ではありませんが、日ごろの業務で磯焼けの深刻さを実感しています。例えば分場前の海岸は、海が荒れた後にちぎれたカジメが大量に打ち上げられますが、この一年はその風景を見ることはありませんでした。潜水調査にも参加しましたが、これまで大型カジメの海中林には出会えていません。前年まであったという群落もブダイなどの食害を受け、多くが消失してしまったようです。アワビの漁獲物調査では、殻の大きさの割に身が委縮した「痩せ貝」が目立ち、アワビにとって餌不足の状況にあると考えられます。

伊豆分場では海藻類の増養殖の研究（本誌ｐ２で紹介）に取組むほか、磯焼けの継続に危機感を持つ漁業者からの相談に応え、海藻移殖や食害魚駆除の手法を提案をしたり、水槽内で育成したカジメやアカモクを建築ブロック等に付着させて提供するなど、現場の活動を支援しています。アカモクはこれまで静岡県でなじみがうすい海藻ですが、カジメが入手困難な中、繁茂の速さに着目し、移殖用海藻として期待が高まっています。魚類による食害を少しでも軽減できるよう移殖場所の選定や設置方法に試行錯誤が続いています。刺網を使ってブダイ駆除に取り組んでいるグループは、漁獲物を産地直売所に販売するルートを開拓し、市場での需要が低いブダイの消費拡大と活動による利益確保を目指しています。県の水産行政も、今年度新たな食害対策事業を立ち上げ、漁業者の協力を得て藻食性魚類の駆除活動を展開することになりました。

黒潮大蛇行の将来について、一時的に「解消の可能性」を示唆する予測モデルが発表されたこともありますが、まだ確実な「解消の兆し」は見えません。長期継続の可能性を念頭に入れながら、今後の動向を見守っていく必要があります。

磯焼けからの回復を目指すには、自分達でできることを粘り強く工夫を重ねて継続していくことが数少ない方法と言えるかもしれません。伊豆分場としても、増養殖の技術開発を早急に進めるとともに、行政や漁業者との連携を強化していきたいと思います。2023 年４月の干潮時、分場前の磯で 20～30㎝ 程度のカジメが多数生えている様子が見られました。昨年秋以降に着生した幼体と思われますが、３月の潜水調査でも白浜の複数の調査点で確認され、漁業者からの情報も含めるとこの時期に幼体の着生を確認している地区がいくつかあるようです。今後、これらの幼体が順調に生育し、夏を超えて存続できるかに注目していきたいです。（石田孝行）